

三谷祐資の美術館構想

—地球を感じる絵画館—

Art Museum Plan Of YUJI MITANI

Art Museum Where You Can Feel The Earth

A4サイズのパソコンプリントを

見開きの状態（A3横）でPDF

ファイルにしています。

閲覧時に縦長に表示された場合は

Adobe Acrobat Reader

のメニューから

表示→表示を回転→右90度回転
で

横長表示にしてご覧ください。

表紙→

『日本の四季は世界でも稀な四季である。』

季節の移り変わりも美しく本来緩やかに移行し、そこに情緒を感じ繊細な日本文化が生まれた。その事に我々はあまり気づいていない。日本のすべては四季があるからこそ、良き文化も生まれ我々を形成している。

地球を描く画家・三谷祐資はいま新たな美術館を構想している。その真意を画家自ら次のように語る。

□温暖化の危機から『四季の国・日本』へ

●日本の四季が危ない

温暖化の影響で年々気温が上昇し、世界中で自然災害が増え、未来への不安を抱いている。経済を止めてしまえば事は簡単だが、そうはいかない。しかし、だからといって私たちは経済の奴隷になってしまってはいけない。便利さに溺れ、いまだ温暖化を止められないでいる。新しい価値観と智慧が必要である。

このままではますます、灼熱の大地と傷ついた自然が残るだけだろう。作物も育たず、食べるものがなくなるのは遠い未来の話ではない。私自身も作物を作るが年々温度変化が激しく難しくなっている。地球上の食料が足りなくなると争いが起きる事になりかねず、動物と変わりなくなる。温暖化を止める国際的な技術開発が急がれるがそれだけでは困難とも感じる。また軍事費が増えている国もあるが、地球上は戦い所の話ではない。その軍事費すべてを、温暖化を止める為の費用にすれば抑止できるという試算もあるというのに。

30年程前に自然を描く中で感じた温暖化の影響が『四季の国・日本』を描く動機となった。夏に雑草や木の葉が青いまま枯れ、丁度その頃、夏の中国から帰った頃だったので日本もいよいよ大陸的気候になりつつあると感じた。そして秋に東北奥入瀬溪谷では美しい紅葉になる葉っぱも所々こげ茶になり痛々しかった。

●全長170メートル『四季の国・日本』を描いた理由

そのことを自然からのメッセージを受けとめ、今の内に日本の自然を描いておかねばならないと思った。百年に一度、千年に一度の災害は自然からの警告と受けとめなくてはならないと思う。

日本の四季は世界にも稀な四季でヒマラヤ山脈のあるお蔭でベンガル湾の湿った空気が高度なヒマラヤ山脈に当たり、冷やされ偏西風で日本に運ばれ湿潤な気候となる。冬はヒマラヤに遮られ、モンゴルの気候となる。地球の温度変動によって四季も乱れてくるのである。そしてもっと広く太陽と地球と考えると、地球の地軸23°の傾きと地球の自転がいろいろな気候を作る。北半球・南半球は反対の季節となり、春分・秋分を境に変わる奇跡の星なのだ。

この『四季の国・日本』を描く前に、全長100メートルのユーラシア大陸大絵画を描いていた。ギリシアから中国までの聖域と鳥瞰図的に描いた絵である。ヨーロッパからインドまで放浪していた思いを描いたものだが、寝るのを惜しんで描いても3年かかった。しばらく続きを描く思いもわかかなかったが、2～3年する内、ある人の言葉「日本海を描いたら日本ですね」が頭によぎって来た。日本は何を描くのか、いろいろ考えたが日本の四季をぬきに何も思いつかなかった。木や水や山や岩、神が宿る様な自然を描きたいと思った。

●困難の連続

それ以前に描き上げていた全長100メートルのユーラシア大陸大絵画がたて2.4メートルあったので、日本の四季を描くとなると春夏秋冬それぞれに20メートルで全長80メートルくらいいいと考えたが、たとえば冬から春へと言っても雪の横に桜と言う訳にもいかず、間合いが必要となる。この間合いの移り変りを描くには同じ長さが必要となる事に気づいた。このデリケートさが日本人的に情緒を生み出しすべてを形作っているのではないだろうか。そして160メートルだが四季以外に梅雨があり、170メートルとなった。

構想は数時間で終わったが、何しろ資金がいる。こんな漠然とした話に乗ってくれるスポンサーもいない。何よりも好きな様に描きたかった。10年間、日本各地取材したので随分と費用もかかった。そして150坪くらいのアトリエにパネルに絵具代。幸いユーラシア大陸大絵画の中で出逢った太陽をほしいといってくださいる人が多く、多少、バブルの余韻もあり随分と助かった。それで費用を出す事とした。すべては太陽の恩恵だった。絵具は自分で作ったが地塗り用の白はドラム缶2本くらいになった。描く方法も何しろ一気に20メートル、ほとんど体と手は疲れ、息は切れ、10年近くよく持ちこたえた。

筆くらいでは追い付かず、20センチ位のはけにほうきまでも使い、これと思うものは何でも使った。それでも途方にくれる程進めない。生きている内に描けるのかと思った。10年は肉をたち神に誓った。なぜ進まないのかと言うのは日本の風景は海以外ほとんど木々である。緑色に塗るだけならよいが木々一本一本作品が大きいので植林する気持ちで描くので気が遠くなる日々だった。そして花びら一枚一枚、何万と描くので大変だった。

そうこうしている内に愛・地球博(愛知万博)の自然との共生で展示話が持ち上がり、まだ2年は掛かるところを1年で描くことになり、息たえそうだった。

一人で描く事の限界を越えられるか。一日一日描けば前に進める。それにしても、たて2.4メートルに170メートル、総重量4トンの壁は大きかった。そして、一同に並べられないので絵を次から次へと動かさなければならぬ。一人では動かせないの、家族に随分手伝ってもらった。10年間毎日スポーツマッサージが必要で、まるでスポーツ選手のように、明日手が動かなければ描けない、しかも休んでいる暇はない。

●いざ万博へ

自然との共生の万博なので箱物が少ない。本会場以外にも会場があり、便利な名古屋駅近くのサテライト会場を選んだ。本会場と違って無料で入れるので何度も見て頂くには良いかと市民会場を選んだ。6ヶ月間なので昼夜、警備がいる様なので人の手が届かない上の方にかけた。下ではいろいろな行事が行われるのでそれも良いかと思っただ、見づらくマイナスの方が多かった。また、四角い会場で真中に立つと四方見渡せるので散漫になってしまい、感動はして頂けたが展示においては失敗だった。今後に生かす良い経験になった。

運送するに当たって、その頃は作品の大きさも一枚が5メートル近くあり、重さも80kg近くあり、それが35枚、梱包も大変であったが、10トントラックに乗せるのも大変で、2枚合わせなので2トンのリフトトラックで上げた。会場に着いても20人位で足場まで持ってゆき、一枚一枚人力で引き上げる作業は延々と続き、言葉も出なかった。2005年の万博から10年近くなり、いまだアトリエに眠っている。

□温暖化より早く美術館を作らねば！

絵描きとして描く事だけが仕事だから、未来において必要ならば活用されるだろうとしか考えなかった。とても美術館などとは考えなかったが、昨今の自然の猛威を感じると、これでは死んでも死に切れない思いで立ち上がり、メッセージを書いた。

●自然と人間のための美術館

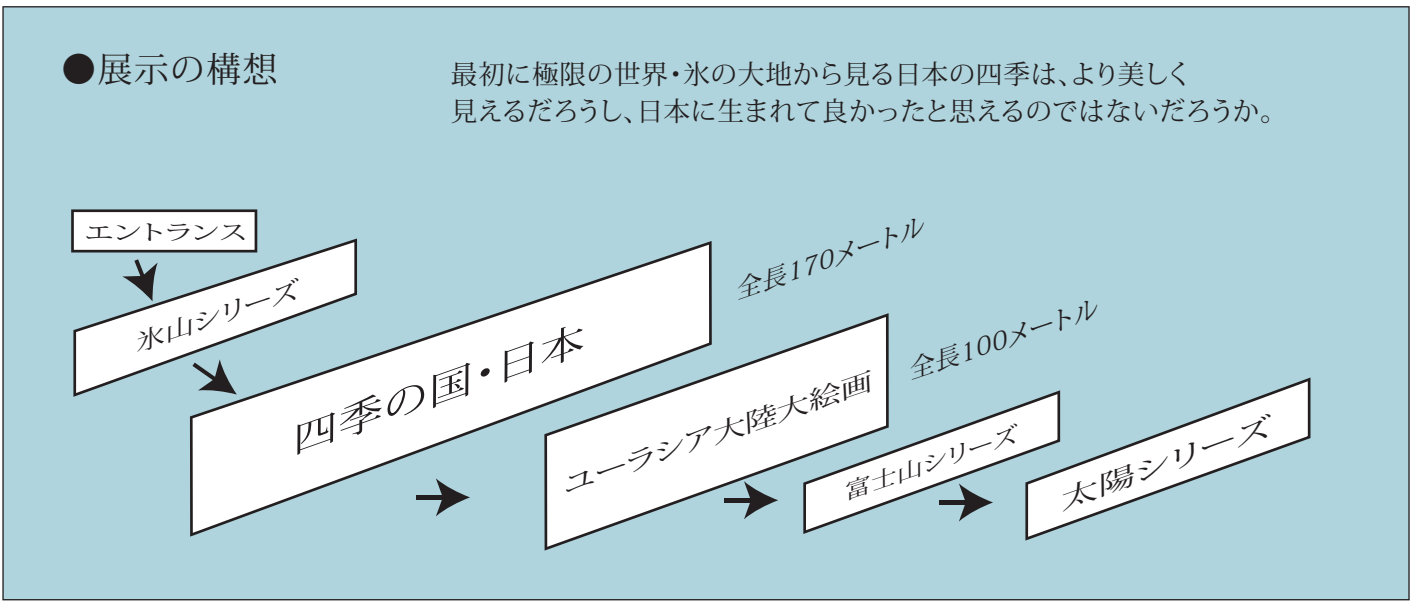
ほんとうは日本国中を展覧して回りたいのであるが、理想は美術館であるが場所はまだ未定である。

日本は四季の国であり、私たちのルーツである。自然と人間は表裏一体である。自然が荒々しいと人間も荒々しくなり、人間が乱れると自然も乱れる。優しい情緒ある自然は人間が優しくなる。

現代はさまざまな困難な問題をかかえている。近年、大災害時においても人をおもいやる日本人に世界から称賛の言葉がよせられ、また「おもてなし」のすばらしさと、日本の技術がほめられるが、世の中の乱れは気にかかるところだ。四季は日本人を形作っている。今一度取り戻し、世界が認める日本人が世界をリードしなく

てはならない。

私の作品はアトリエに埋もれ、あまりの大きさに自分でも見れないほどだが、一たび光を当てれば再びエネルギーとパワーを発する。もう一度そのエネルギーとパワーを感じて見たい。それは皆さんの力になるはずだ。



□未来の人達におくる。

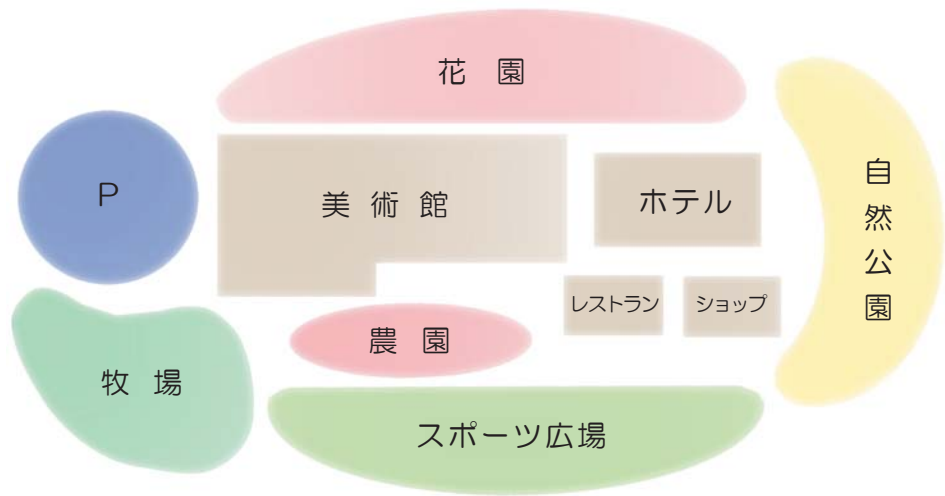
●美術館で心の栄養を

何よりもそれぞれの人が自分を見つめ直す美術館でありたい。日本の良さを見つめ直し、絵画と音楽を融合したからだ全体で感じられる美術館、心の栄養とパワーを得る美術館として、滞在も出来るようホテルがあり、自然を取り入れ農園から牧場まで触れられる美術館。ゼロエネルギー未来型、無農薬有機栽培レストランではそれらを食べ頂き、ゆったりとした時間の中で読書したり運動したり、内面からリフレッシュして頂きたい。美術の枠を越えた美術館で一人一人がオーナーとなり、店をする人は独立してやり、最高をめざす。

未来の子供達におくる美術館でありたい。キャンプしたり自然の遊びが出来る美術館。今の子供達に地球の温度が上がっていると言っても昔の経験がないので理解出来ないそうである。昔の日本は四季も穏やかであった事を伝えたいし、地球の温暖化阻止に向けて市民的なレベルで発信したい。自然と人間、四季と心を伝えるために。

これが私が考える、自然と人間のための美術館であり、いまその実現に向けて動き出そうとしているのである。

□日本を訪れる外国の人達にも見てほしい。



全長170メートル絵画 『四季の国・日本』

日本は世界に稀なる四季の国である。25年前に感じた温暖化への想いが描かせた。

二十五年程前に、四季の移ろいがおかしいと感じ始め日本全国をくまなく取材するが、自然の悲鳴が聞こえてくる事が制作への想いを深めた。秋の紅葉が物語る色が冴えない。紅葉前に葉が落ちてくる。その時感じた温暖化が一段と進んでいる昨今である。

一九九八年、日本は四季の国、これを描こうと奮い立ち、発表も何も考えずに思いのまま描くうちに、様々な想いが浮かんでくる。描けば描く程何と自然は複雑で雄大なものか、言葉では表せない。到底、人の力によって作り得ることの出来ないものだが、あつて当然となつてしまったことを反省する。

作品が大きくなってしまったのは、余りにも想いが強かつたせいかもしれない。一人で描くことの限界を知ること出来るかもしれないが、自然には敵わない。自然の崇高さや畏れまで描けたらと思う。博物学者の南方熊楠翁は、百年も前にエコロジーという言葉を使い、「自然の破壊は人間の破滅に繋がる」と述べられ、産業革命でいかに自然が破壊されたかを知り、自然を身を持って守った。

昨今の世の中の乱れや社会不安は、その現れかもしれない。自然への感謝が薄らいだ事が、子孫にまで影響を及ぼすことは避けたい。

日本人の根幹を成すものは、やはり日本の四季であり、繰り返される四季の緩やかな営みや美しさが私たちを育ててくれている。

それがエネルギーとなり、勤勉さや優しさ強さを生んでいる。絵によってそれが現され、そして人々に夢や希望・勇気が与えられるとしたら嬉しい。このままではいけない、日本再生の一つにでもなれば、描いてきたことの意味がある。微力ではあるが、自然との共生の第一歩である。

二〇〇五年

愛知万博パンフレット文より

【『四季の国・日本』 170メートル絵画】



『四季の国・日本』で描きたかったのは和辻哲郎の言う情緒的日本人である。この自然環境が国民性を培う。春、雪が解け、フキノトウが出て、コブシが咲き、桜が咲いて藤が咲き、野山はゆっくりと緑におおわれる。日本人にとっては当たり前のことだが、このゆっくりとしたくり返しが日本人たる国民性を作った。

四季の自然の中で風物も生まれ、古来歌に読まれたり、四季の旬を食卓に運び、愛でた。世界も驚く繊細なまでの美しさとヘルシーで魅了する。その中で「おもてなし」も自然と生まれた。**私達が子供の頃は真夏日などと言う言葉もなく単なる暑い夏で夏休みも日中、外でよく遊んだ。**けれどもやさしい自然ばかりではなかった。台風や嵐に雷、地震に

耐え恐れ畏怖の念を抱いた。自然をそのまま受け入れ決してうらんだりしない。

昨今、大災害においても大きな悲しみの中でも整然とした日本人。私達にとっても当たり前の事かも知れないが世界が称賛する日本人である。この事も四季が美しい事にも由来するのではないだろうか。冬の寒さに耐える為、秋忙しく稔りを蓄え勤勉に働く。冬には家の中で物を作り春を待つ忍耐強く、思いやりもある国民性は四季によって培われた。世界にも稀な奇蹟的な四季のお蔭である。日本に生まれて良かったと思う、そんな国でいつまでもあって欲しいと思う。自然は人間を作る。四季の乱れは人間の乱れにも通じ世界規模の温暖化は人類を破壊する。自然からの声を聞こうではないか。

【『ユーラシア大陸大絵画』 100メートル絵画】



30歳代、世界を放浪するヒッピー世代がまだ残る頃、私は洋画を描いていたが、西洋画と日本画の違いと生活をこの目で確かめたいとバックパッカースタイルで放浪の旅に出た。陸路ヨーロッパ全土を回り、ジブラルタル海峡を渡りモロッコ・エジプトに行き、陸路インドまで行くつもりが、途中国境封鎖に会って飛行機で飛んで、インドまで辿り着いた。全く、異なる文化の連続だった。心の整理ができないままだったが。

何年もする内、大作で樹木を描いていたら、突然インドでの森が脳裏に蘇って来た。東に西へと絵が増殖して、西は

ギリシアから東は中国へと続く、たて2.4メートル長さ100メートルの絵画になってしまった。1日、15時間描いても3年かかった。

そのとき描いた、**砂漠の太陽との出逢いから25年。今だ太陽が中心となる絵を描いていて、**これからも終生描くつもりだ。今想えば太陽をテーマに長年描くとは、夢にも思わなかった。ギリシャ・エジプトでもよく太陽の神殿に行った。ある日突然天から現れた太陽だからエネルギーはすごい。その頃は真昼間の太陽をサングラスもかけずいつまでも見続ける事が出来、人間にはまだ隠された機能がある様に思うのだが、真似はしないでほしい。

日本の象徴 【富士山シリーズ】

170メートルの大作の中心に日本の自然の象徴としてまず富士山を描いた。その途中で阪神大震災に会い震度7を体験した。当時、宝塚に住んでいて木造住宅であったのですさまじい揺れだった。重苦しさに起きる15分前に目は覚め電気をつけていたので一部始終覚えているが、これで死ぬと覚悟した。1 分余りは長かった。築40年の木造住宅も奇蹟的に助かり、アトリエも大した事もなく、100メートルの絵も何もなかった様にそのままだった。やはり太陽のお蔭だと手を合わせた。神戸の大震災以後、世界での大災害の火蓋が切られた様に思われる。日本で起こる事が世界でも起こる事になるとは、余談過ぎたが書かずにはおられない。

富士山に通い始めて25年近くなるが、やはり冬のはりつめた富士が好きだ。初めて行ったのも2月の厳冬期だったが、今みたいに写真や観光に訪れる人もなく、一人で富士に対する様な緊迫感があり、車も使わず、歩きに歩いた行に近い取材だった。その頃は遠く眺める富士山が多かったが、近年は富士山におもいきり近づいて、富士山の素顔を描いてみたい。そして心が聞きたい。いや富士山が描けと言っている様に思う。



温暖化の影響 【グリーンランド冰山】

この目で地球温暖化の影響の象徴としての冰山を確かめに出掛けた。白夜が終わり、秋の頃と日本では表現するのだが、着くなりブリザードが3日程続き一面の雪、ほとんど氷でおおわれた大地も一部イヌイットの住む土地は岩盤の上でこげ茶の大地は雪一色で真冬となった。秋はなかった。それこそ木が無いのであった。

木造の漁船に乗って出掛けた冰山には絶句した。ただ船は進んで行くが、茫然と眺めているのが精一杯。あまりの驚きと切り立った造形のすごさ、漁師の説明の言葉もなく、エンジンの音以外無音の世界、モンゴル草原の無音の世界とは全く違った、死の恐怖を感じる極限の世界に踏み込んだと言える。

予言の書ではないが、ニューヨークやマンハッタンの様な造形やヨーロッパのカテドラルやガウディの建築のような、あるいは砂漠のピラミッドの様な冰山が現れ、しかも山の様に大きい、とても冰山とは言いがたい。黙示録なのか過去なのか未来なのかどれもこれも凍りついた世界。何かを訴えてくる。温暖化の影響を見に来たのに予想もしない展開にまるで他の惑星に踏み込んだ様な S F の世界。しかし北極であり地球なのだ。

何を描こうと冰山しかない。漂氷は一万年前の氷。雪が固まったもので中に一万年前の空気がつまっている。しかもアイスブルーに輝きクリスタルに美しい。ただありのままをリアルに描こうと決心した。

グリーンランドは日本の国土の6倍。中心部の氷の厚さは3千メートルあり、丁度、ヨーロッパ・アルプスが氷にうまり、所々、岩山が見えると想像して頂けると説明しやすい。海に近い沿岸部は500メートルから1000メートルあり、いかにすごい氷か飛行機から見ると地平の果てまで白一色、その氷が解けると世界の都市はほとんど水没するから大変なのだ。産業革命の頃から比べると10倍の速さで解けていて、表面の解けた水が氷の下を流れているらしい。急速に解け出すともっとスピードが上がる。世界は他山の石の様に思っているが。



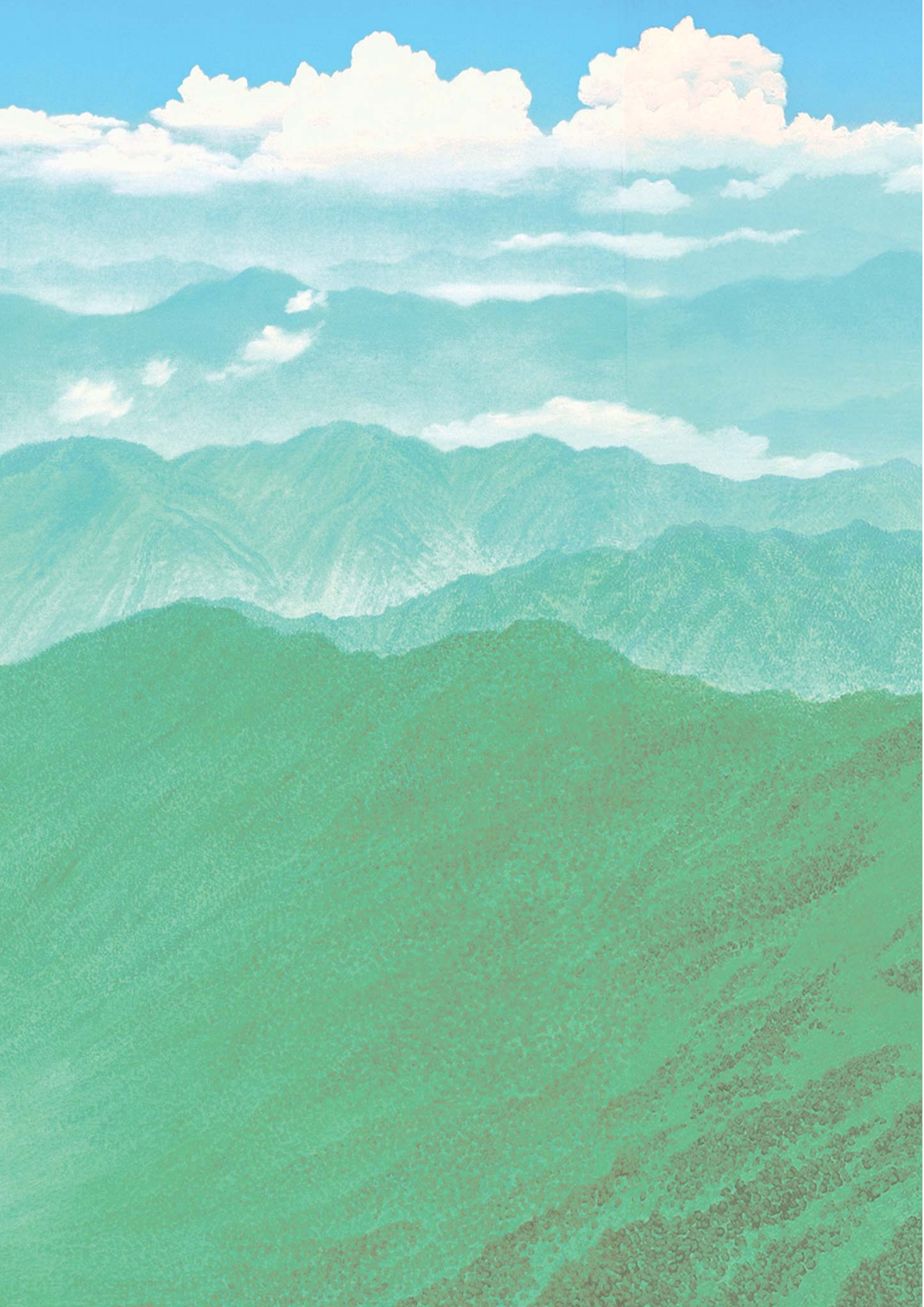
■ 三谷祐資 Mitani Yuuji

- 1946 三重県伊勢市に生まれる。
- 1978 東洋と西洋の比較のためヨーロッパからインドまで放浪する。
- 1989 旅の記憶を元に描いた『ユーラシア大陸大絵画』が全長 100 メートルになる。その中に初めて太陽を描き、神秘的な出逢いにより太陽を描き続ける事になる。
- 1990 ～ 富士山に通い始める。四季の移ろいに異変を感じ日本各地を 10 年取材し、全長 170 メートル『四季の国・日本』の制作が始まる。
- 1992 第 61 回伊勢神宮式年遷宮に際し、神宮会館へ絵画制作奉納。
- 2005 愛知万博に『四季の国・日本』を展示。
- 2006 富士山本宮浅間大社 御鎮座 1200 年奉祝、絵画制作奉納。



太陽を求め 30 カ国を旅する。「グリーンランド冰山」展 「富士山に臨む」展など 日本各地で個展開催。

ホームページ： <http://www.y-mitani.net/>



←裏表紙